

文藝春秋

団塊世代「幸福」の一千日計画

新宰相夫人特別手記 安倍昭恵 十一月号

文藝春秋
BUNSHUN BOOK CLUB
BOOK
倶楽部

書評委員(五十音順)

麻木久仁子(タレント)
猪木武徳(国際日本文化研究センター教授)
加藤陽子(東京大学助教授)
佐藤 優(起訴休職 外務事務官)
穂村 弘(歌人)
四名の方が代で執筆します

コルナイ・ヤーノシュ
盛田常夫=訳

ハンガリーが生んだ戦後最良の経済学者の人生と苦悩

コルナイ・ヤーノシュ自伝

評者 猪木武徳

ハンガリーの人口は日本の十分の一にも満たない。しかし芸術・学問の分野で数多くの逸材を輩出している。古典的であると同時に革新的でもあった作曲家バルトーク、マルキストでありながらカフカやトーマス・マンの真価にいち早く注目した文学理論家ルカーチ、そして社会科学の分野でも、マンハイム、ポランニ兄弟、フォン・ノイマン(経済学でも優れた業績を残した数学者)など、独特の魅力に溢れる世界的な頭脳を生み出した。

社会主義経済の理論家として知られたユダヤ系ハンガリー人ヤーノシュ・コルナイは、一九八〇年代半ばにその分野での業績を評価されてハーバード大学に招聘される。ちょうど社会主義体制の崩壊の予兆を感じる人が出始めた頃である。コルナイの経済学者としての姿勢は、終始、社会科学の真理を専制と虚偽が支配する政治の世界からいかに護るかという点に向けられていた。

脱スターリン化現象で、ハンガリーが戦時社会主義体制から脱却しつつあった頃、ソ連経済学界に先んじて、社会主義経済体制を批判するいくつかの重要な論文がハンガリーで現れ始めた。それらは社会主義経済の計画管理が、企業に適切な「刺激誘因」を与えていないこと、需要と供給による相対的価格形成がなされていないことを指摘していた。論文中に「市場」という言葉は表立って現れないが、市場による経済の制御を提唱するものであった。

若き日のコルナイが、五六年十月のハンガリー動乱直前に提出した博士学位請求論文『经济管理の過度集権化』は、初

めて本格的にソ連型システムを批判した「政治的にスキャンダラス」な作品であった。この論文により、コルナイは革命分子として研究所から追放される。六〇年代に入り経済改革への気運は高まるものの、改革への本格的な第一歩は、一九六八年の指令伝達方式(ソ連型計画システム)の廃止まで待たねばならなかった。しかし、このハンガリー型の「新経済メカニズム」も理論どおりには作動しない。結局、一九八九年一月の国会で決議された「結社の自由」と「集会の自由」を保障する法律によって事実上の複数政党制が承認されて初めて、実質的な経済発展への道が開ける。これは、

経済的自由(市場経済)と政治的自由(民主制)がいかに密接に結びついているのかを証明する事例といえよう。

本書を読むと、政治体制が経済発展だけでなく文化の創造とも深くかわっていることに気づく。二十世紀前半のハンガリー文化がその後の半世紀と比較にならないほど優れたものであったことが、政治体制と文化との関係を雄弁に物語っているからだ。

コルナイは、アメリカでの講義と研究、そしてポストンとブダペストの頻繁な往復を負担と感じはじめ、二〇〇一年、十八年間勤めたハーバードを去ることを決意する。送別会でのコルナイの挨拶の一節は心を打つ。

メモワールとエッセイを織り交ぜたようなスタイルで書かれた本書を通読すると、ヨーロッパ知識人の強靱な精神に支えられた学問的廉直さ、アメリカとヨーロッパの知的風土の違いなどが具体的に分かり興味深い。そしてそれ以上に、戦後東欧の社会学者が経験した苦悩の深さを今更ながら思い知らされる。

権力にも富にも、そして世間にも阿る(あまね)ことのない学問者の知的遍歴の記録として本書の歴史的价值は大きい。訳者はハンガリー経済の改革史の専門家であり、著者とも親交がある。本書はハンガリー語原書からの翻訳である。



日本評論社
4935円